

なんか俺の思ってた憑  
依転生と違う

のろとり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺こと、斎藤 蓮（さいとう れん）は色々あつて憑依転生することになった。だが、  
思つてたのと違つた。

－ここから大体あつてるあらすじ－

俺は数々の魔王を（ゲームで）倒してきた男、斎藤 蓮（さいとう れん）。少し油断  
した俺は刺客（タンス）にやられてしまった。そして、目が覚めると女性が目の前にい  
た！その女性いわく、魔王がいる世界に転生してくれと頼まれた。そうして、転生した  
俺に待ち構えていた驚くべきこととは……！

# 目次

いくら何でも予想外な転生ライフ

1



# いくら何でも予想外な転生ライフ

主人公 「俺の思つてたのと違うじゃねえかアアアアア!!」

俺の名前は、斎藤 蓮（さいとう れん）。別に覚えてもらう必要はない。俺が何故急に叫んだか。どうしてこうなつたか。少し振り返つてみよう……。

\* \* \* \*

斎藤 「……よく、こういうことがあると『ここはどこだ』とか言うよなあ」

俺は目を開けると、白黒の部屋？にいた。別に俺の部屋のことでもないし、この場所も知らない。そもそも部屋なのかも分からぬ。俺はタンスの角に人差し指をぶつけた痛みで気絶したはず、そのまま死んだのか……うわっ、恥ずかしッ!! 俺の推測としては、よくライトノベルにある転生をするときに移動される場所なのだろうか。

??? 「こんにちわ。私は貴方たちで言うところの女神です。今から貴方、斎藤 蓮さんには t 「転生してもらうんでしょ。分かるんだよ」台詞をとらないで下さい！」

何処からか現れた自分を女神という人が言おうとしたことを遮ると、怒られてしまつた。

斎藤 「いや、こういう展開はもう見飽きてるんだよ、ライトノベルでよくあるからな。

それで俺は何処に転生するんだ」

この人からは普通の人とは違う雰囲気を感じる。まるで、普通じゃないような。取り敢えずはこの人を女神と信じることにした。

女神「最近の若い人はそういうのが好きなんですか？」まあ説明が省けたのでいいです。今、貴方が言つたようにこれから転生してもらいます」

転生か。ライトノベルだけだと思つてたな。

斎藤「……あつ、そうだ。特典は何かあるのか？」

特典があれば転生しても世界がヌルゲーになるかもしねないが、知つたこつちやねえ。まあ、どんな世界に行くかは知らないが。

女神「いいえ、ないです」

そう聞いた俺はこう即答した。

斎藤「あつ、転生は却下で。今から地獄に落としてください」

女神「え!? ちょっと待つて下さいよ！」転生してくれないと私、上司に怒られちゃ

います！ それに、なんで地獄に落ちようとするとんですか!!」

女神さんが慌てて転生してくれと言つてきた。

斎藤「天国より、地獄の方が面白そうだからな」

そもそも、特典があるのが普通だと思ったが普通じやないのか？

女神「……兎に角、転生してください」

斎藤「分かった。そうえば、どんな世界に行くんだ?」

女神「貴方たちの世界で言う、ゲームのようなどころですね。ほら、魔王を倒して世

界を救うよーな」

斎藤「オレ、テンセイ、キヤツカ」

女神「だからなんで断るんですか!!」

また、断ることにした。

斎藤「特典が無いから、どう考へても街から一步出たら死ぬじやねえか!! 誰がそん

なところに転生するか!」

女神「お願ひです……」

女神さんはそう言いながら、上目遣いをしてきた。グツ!?……しようがない。

斎藤「分かった、転生するよ

女神「やつた! あつ、少し訂正しますが貴方がするのは『憑依転生』です」

憑依転生?……ああ、あれか。転生したら、元からいるキャラに憑依しました。つて

いう……。

斎藤「憑依転生か。分かった」

女神「はい」

女神さんがそう言うと、俺の足元に魔方陣？が現れた。徐々にその魔方陣？ひかり始めて、俺はそれが眩しく感じて目を閉じ始めた。

斎藤「では、頑張つてきて下さいね」

女神さんのその言葉を聞いた瞬間、俺は白黒の部屋？から消えた。

\* \* \* \* \*

斎藤「よし、ここが異世界か」

俺が目を開けると、中世ヨーロッパのようなライトノベルでよく舞台になるような場所にいた。勿論、街を歩いてる人もシスターのような人物だったり、獸耳が生えている者もいた。おお！凄いなここ!! そうだ、今の俺の服装はどうだろ。折角異世界に来たのに、変な服だと浮いちまうからな。

斎藤「……え？」

俺は服装を確認しようとした俺だが驚愕した。別に全裸でも、ジャージ姿だから浮いてしまうだとかそういうのではない。透けているのだ。『何が』ときかれると、『俺自信』が。そう困惑していると……。

女神『聞こえますか？』

急にさつきの女神さんの声が聞こえた。テレパシーというやつか？

斎藤「ああ。聞こえるぞ」

どう返せば返事が返せるか分からなかつた俺は、取り敢えず声に出した。

女神『ああ、よかつた。聞こえたつてことは無事に憑依転生できたんですね』  
いや、無事じやないんだが。

斎藤「いや、体が透けてるんだが。失敗してるだろこれ」

女神『？ ちゃんと成功しますよ』

斎藤「いやいや、失敗だろ。これじゃあ幽霊だぞ、幽霊」

女神『ああ。貴方たちの知識と私たちの知識では少しづれがあるのを忘れてました』  
ズレ？ 俺は嫌な予感がしながらも恐る恐る女神さんに聞いてみた。

斎藤「その、ズレっていうのは？」

女神『貴方たちが思つてる憑依転生は【転生して、元からいるキャラに憑依】で、本  
来としては【転生して、幽霊になつて憑依出来るようになる】です』

斎藤「…………」

女神『……あつ、私はまだ仕事があるのでこれで。異世界生活を楽しんで下さいね』  
俺が放心状態になつてると、女神さんの声が聞こえなくなつた。そして、どのくらい  
の時間が流れたであろう。やつと正気に戻つた俺はこう言つた。

斎藤「俺の思つてたのと違うじやねえかアアアアア！」

俺の異世界ライフは大変なことになりそうだ。